

親鸞・歎異抄とイエス・聖書を嚙る

A Study of Shinran & Tannisho and Jesus & Bible

武士侯勝司
BUSHIMATA Katsuji

今年の始め、地元の藤枝で親鸞（歎異抄を中心に）と（新約）聖書を紹介する講座を持った。ど素人の私ではあるが、二つの世界に共通する精神（哲学）があることに驚かされた。時代は約一二〇〇年隔たっており、全くの異世界の営みである。（ただ、奈良時代以前に、ユダヤ教が日本に到来していた、との説もあるが）

親鸞の本音を記録したと言われる「歎異抄」に、有名な「善人なをもて往生遂ぐ。いはんや悪人をや」～自力作善の人（仏道の刻苦修行、つまり自力で善い行いを重ねて、自らを極楽往生させる人）より、自分の行いの悪に苦悶しつづける者こそ、仏の慈悲によって浄土に往生できる～とある。「本願他力」にかなっていると主張する。（この言葉は、十代の終わり頃、自分の生の一コマ一コマにいかにも悪をはびこらせていたかに悩んでいた私に、衝撃を与えたことを思う。）一方、聖書（マルコの福音書）でイエスは、「医者が必要としているのは、丈夫な人ではなく、病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と語る。その考えの土台となっているのは、性悪観（すべての人間は原罪を背負って生きている）である。「人の口から出て来るものこそ、人を汚す。中から、つまり人間の心から悪い思いが出て来るからである。」と説く。親鸞は、「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生」と、全ての人間（凡人・庶民）は、罪の深みとどす黒い欲望にまみれて生きていかざるを得ない、と語る。しかし、だからこそ「絶対他力」によってしか救われぬ、いや救われなくてはならないという、世の常識（自力作善による往生）を逆転させる発想が、二つの宗教（思想）のダイナミズムである。

その時代背景として、ユダヤでは、異国（ローマ帝国）の支配を受けて忍従を強いられながら刻苦する民衆の病や罪を癒す神の子、奇跡を起こす救世主（キリスト）として迎えられたのである。一方日本では、保元・平治の乱、源平の戦乱、うち続く飢饉・疫病の中で、退廃する貴族・僧門の支配に喘ぐ末法の世（仏法が衰え、人の世が減ぶ）にあつて、悲惨を極める「煩惱具足」の民衆に阿弥陀仏の光を照らす存在として迎えられたのである。それは、キリストにとっては、かたくなユダヤ教・律法学者の憎悪との闘い、親鸞にあつては、戒律を重視する南都（奈良の興福寺等）・北嶺（比叡山・延暦寺）の迫害との闘いを意味していた。キリストは、病（ユダヤ教の律法では、戒律を守らない人の罪業）を癒し、悪魔を追放する「神（の子）」を「信じるや否や」という単純明快なものであり、親鸞も、「南無阿弥陀仏」と無心に一回称えれば（一念義）、仏の慈悲によって浄土に往生できるという、民衆のだれでもが受け入れら

れる直裁さを持っていた。

そして、その思想の底に流れているのは、人間の善悪の行いなど、ちっぽけなもの、微々たる弱いものに過ぎない。だから、神や仏という、限りなく大きな力に救われるしかないという、人間の実存の真を捉えている思想と言えよう。つまり、か弱く、愚かな人間は、神や仏という「絶対他力」によってしか、「天国」や「浄土」にある永遠の光、浄福に至れないのだ、という哲学が流れている。だから、イエスは説く。「人間にできることはないが、神は何でもできる。」親鸞は、「弥陀の請願にたすけまひらせて、往生をばとぐるなり」と、この大宇宙における、罪多き、微弱な人間存在に救いのまなざしを向けている。だからこそ、浄土宗は、日本最大の宗派となり、キリスト教は、世界に伝播したと言えよう。

しかし、両者とも、権力化した厳しい律法（ユダヤ教）・戒律（南都・北嶺の寺々）にがんじがらめに苦しめられた民衆に迎えられたが、思想（宗教）の先達であるイエスは、無実でありながらも、人間の罪を背負って処刑され、破戒僧（妻帯、肉食）「愚禿」親鸞は、罪人として越後に六年間流罪の刑に処せられる。先達者は故郷に容れられず、である。

もう一つの共通点は、「父母」についての視点である。親鸞は、「父母の孝養のためとて、一辺にても念仏まふしたまふることいまださぶらはず、そのゆえは、一切の有情は、みな生々の父母兄弟なり」と説く。イエスは、「『わたしの父母とはだれか』と答え、周りに座っている人を見回して言われた。『見なさい。ここにわたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、母である。』」と、人々に告げる。親鸞は、「生々の兄弟」というとらえ方で、仏教でいう、人間はみな「六道輪廻」の苦をさまよっているともがらという視点であり、イエスは、「神の御心を行う人」がともがらである、という視点で、質の違いはあるが、世界観としては、共通の根を持っている。ここで、ぼっと浮かんできたのは、「世界が幸福にならないうちは、個人の幸福はない」とした、宮沢賢治の純粋な熱情的生涯である。また、止むことのない中東・アフリカ等の戦乱の悲劇も、東北大震災・明日の見えない原発の被災も、すべて、「ともがら」に起こっているという視座で捉えた生き方をせよ、と親鸞もイエスも伝えている。また、逆に、わたしの隣で苦しんでいる人をなおざりにする人に、世界が救える、などとは、両者とも語ってはいないのである。